

犯罪捜査を支援する

警察庁 科学警察研究所 犯罪行動科学部 捜査支援研究室長

渡邊和美 (わたなべ かずみ)

科学警察研究所は、警察庁の付属機関として設置された、国立研究機関です。犯罪科学に関する国内唯一の総合的な研究機関として、犯罪の理解や防止、犯罪捜査にかかわる多岐にわたる領域の研究者約100名が勤務し、研究に取り組んでいます。心理学を学問的背景に持つ研究者は17名ほどおり、ポリグラフや少年非行、犯罪予防、捜査支援、交通安全に関わる研究を所掌するそれぞれの研究室で働いています。

研究室はそれぞれ2～5名の研究者から構成されていますが、研究開発業務の他、都道府県警察から依頼される鑑定・捜査支援、都道府県警察の科学捜査研究所職員や警察官を対象とした研修を業務とするため、多忙な毎日を送っています。

国家I種試験（現在の国家総合職試験）を受けて入庁した当初、私は少年非行や犯罪被害者に関する研究などに取り組んでいました。平成6年、当時の上司であった故・田村雅幸氏から「日本でも犯罪者プロファイリング（犯人の行動を分析し、犯人の属性・居住地等を推論すること）の研究を進めていかないか」という言葉をかけられ、以降、捜査に役立つ心理学の技術をどう開発していくか、という大きな課題に継続して取り組んでいくこととなります。

平成15年には組織改正により現在の捜査支援研究室が設置さ

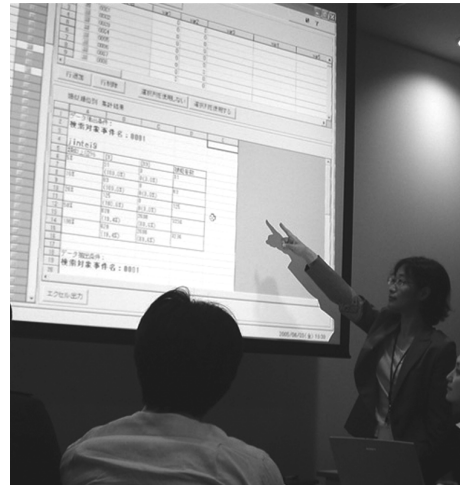
れ、英国のデビッド・カンター教授が創設した「捜査心理学」を研究領域とする、行動科学の視点から犯罪の捜査を支援する技術の研究する研究室ができました。捜査心理学は新しい学問領域であるため、取り組むべき課題は多く、捜査現場の実務に直結する技術を求められる点が大変なところです。「心理学に基づく実証的なモデルを見出すこと」と「現場ですぐに役立つ使いやすいツールをつくること」が常に迫ってきます。しかし、これらは全て研究職としてのやりがいにつながっていると感じています。

最近では、各種犯罪の犯人の心理と行動に関する基礎的な研究のほか、捜査の実務に直結する課題として、犯罪者プロファイリングや取り調べに関する心理学的研究に取り組んでいます。これらの研究は「カッコいい」と誤解されることが多いのですが、非常に地道な研究作業が必要とされる地味なものです。

私たちの研究フィールドは、警察活動の現場そのものであり、警察官との関わりは研究の推進に欠かせません。また、研究対象は事件そのものである他、犯罪者、警察官、私たち研究者、一般の方々

Profile — 渡邊和美

1990年、学習院大学文学部心理学科卒業。警察庁科学警察研究所に入庁。2007年、東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科修了。博士（医学）。法科学研修所教授、警察大学校教授などを兼務。



データに基づく事件の評価

など目的により様々です。研究方法も、文献調査や半構造化面接による面接調査、質問紙調査、実験など、複数の手法が用いられます。

調査や実験はある程度の規模で実施するため、捜査支援研究室では必ずチームで課題に取り組んでいます。チームでより多角的な視点から複数の取り組みを行うことで、より実証的な成果を出している！と頑張っているところです。

科学警察研究所と科学捜査研究所が混同されることもありますが、後者は都道府県警察の機関です。私たちと科学捜査研究所の心理担当者とのつながりは強く、日本における犯罪者プロファイリングは彼らと一緒に創ってきたと言っても過言ではありません。このような研究仲間が全国にいることをとても心強く感じています。